

2016年6月24日

高校生以下の孫がいる 60～70 代の夫婦 2 人世帯男女 1,068 名に聞いた 『高齢夫婦世帯における別居家族との食事』 ～母方近居家族にみる親密交流～

第一生命保険株式会社（社長 渡邊 光一郎）のシンクタンク、株式会社第一生命経済研究所（社長 矢島 良司）では、高校生以下の孫がいる 60～70 代の夫婦 2 人世帯男女 1,068 名を対象に別居家族との交流に関するアンケート調査を行いました。今回のリリースでは、この調査のなかから子や孫との食事に関する調査結果についてご報告いたします。

本リリースは、当研究所ホームページにも掲載しています。

URL http://group.dai-ichi-life.co.jp/cgi-bin/dlri/ldi/total.cgi?key1=n_year

《調査結果のポイント》

子や孫との食事の頻度 (P. 2)

- 約半数が「月に1回」以上の頻度で子や孫と食事

子や孫との食事の機会 (P. 3～4)

- 過去1年間に子や孫と食事をした人のうち、「ふだんの食事」の経験率は69.8%、「特別な日の食事」では84.1%
- 「ふだんの食事」の経験率は、孫が就園前の人や孫が娘の子の人、子や孫が30分以内の範囲に住む人で高い

子や孫との食事の主な場所 (P. 5)

- 食事の主な場所は、「あなたの自宅」

子や孫との食事の内容 (P. 6)

- 自宅で「特別な日の食事」をともにした女性の 68.2%が「ふだんより費用をかける」

子や孫との食事に対する意識・生活の変化 (P. 7)

- 97%が「食事の際のコミュニケーションが楽しみ」

支援としての食事 (P. 8)

- 孫が就学前の女性や孫が娘の子の女性、孫が自宅から30分以内に住む女性では、8割以上が「子の家事や子育てを助けてやる」

準備・後片付けの負担 (P. 9)

- 「子の家事や子育てを助けてやる」という意識が強い女性では「準備・後片付けの負担感」も大きい

＜お問い合わせ先＞

(株)第一生命経済研究所 ライフデザイン研究本部

研究開発室 広報担当（津田・新井）

TEL. 03-5221-4771

FAX. 03-3212-4470

【URL】<http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi>



DAI-ICHI LIFE
RESEARCH INSTITUTE INC.

《調査実施の背景》

日本の高齢者が望ましいと考える老後の子や孫とのつきあい方は、2000 年前後を境にして子や孫といつも一緒に生活する「同居密着型」から、ふだんは別々に暮らし、ときどき会ってともに過ごす時間やコミュニケーションを楽しむ「別居交流型」へと移行しています。内閣府の調査によると、1980 年時点では「子や孫とはいつも一緒に生活できるのがよい」という価値観を支持する人が 6 割以上を占めていましたが、近年では「子や孫とはときどき会って食事や会話を楽しむのがよい」という価値観をもつ人が増加し、多数派を占めるようになっていきます。現実の高齢者の住まい方をみても、地域差はみられるものの、子や孫と同居する三世同居世帯は減少しています。

このようななか、高齢者にとっての別居家族との「食事」に注目し、子や孫と食事をともにすることや、食事を通じた家事や子育ての支援等が、高齢者の意識の面でどのような意味を持っているのかを明らかにした調査はこれまでにありません。近年では子育てをする上で祖父母との「近居」が注目されていますが、子の助けになればと祖父母のサポート提供が行過ぎれば、食事の機会が祖父母の負担につながってしまう可能性もあります。これに対して、ふだんは別々に暮らすようになったからこそ、ともに食事をする機会が祖父母の楽しみになっていたり、ふだんは食べないメニューや食品を生活に取り入れる機会になっている可能性もあるのではないのでしょうか。

以上の問題意識から、全国の 60～70 代の夫婦 2 人世帯の男女を対象とするアンケート調査を行い、高齢夫婦世帯における子や孫との食をめぐる交流が、彼らの生活や意識にどのような影響を与えているのかをたずねました。

《調査概要》

■調査名	シニア夫婦世帯の別居家族との交流に関する調査
■調査対象	人口 10 万人以上の都市に居住し、高校生以下の孫がいる 60～70 代の夫婦 2 人世帯男女
■サンプル数	1,068 名
■調査方法	インターネット調査(株式会社クロス・マーケティングのモニター)
■調査時期	2016 年 1 月

		N	%
性別	男性	534	50.0
	女性	534	50.0
年代別	60～64歳	308	28.8
	65～69歳	422	39.5
	70～74歳	242	22.7
	75～79歳	96	9.0
孫の人数	1人	257	24.1
	2人	303	28.4
	3人	214	20.0
	4人	167	15.6
	5人以上	127	11.9

		N	%
孫の学齢 <複数回答>	就園前	484	45.3
	園児	497	46.5
	小学生	579	54.2
	中学生	229	21.4
	高校生	148	13.9
	大学生	61	5.7
	学卒	39	3.7
孫宅までの 所要時間	5分以内	97	9.1
	15分以内	159	14.9
	30分以内	169	15.8
	1時間以内	233	21.8
	3時間以内	179	16.8
	3時間超	231	21.6

子や孫との食事の頻度

約半数が「月に1回」以上の頻度で子や孫と食事

図表1 子や孫との食事の頻度(全体、性別、孫の学齢別、孫の続柄別、所要時間別)

(単位:%)

	ほとんど毎日	週に2～3回程度	週に1回程度	月に2～3回程度	月に1回程度	年に2～3回程度	年に1回程度	ほとんどない
全体	1.5	4.0	8.8	13.9	22.4	35.9	6.5	7.1
<性別>								
男性	1.5	4.5	7.9	14.8	20.4	37.1	6.9	6.9
女性	1.5	3.6	9.7	12.9	24.3	34.6	6.0	7.3
<孫の学齢別>								
就園前	1.2	6.1	12.7	16.7	17.1	33.1	4.5	8.6
園児	1.4	3.6	10.5	15.5	23.1	35.4	3.6	6.9
小学生	1.6	3.9	6.5	12.5	24.9	36.9	8.6	5.2
中高生	1.9	1.9	5.6	9.9	23.0	38.5	9.3	9.9
<孫の続柄別>								
息子の子	0.4	2.0	5.4	10.7	23.3	42.8	7.2	8.3
娘の子	2.3	5.6	11.2	16.4	21.8	30.7	6.0	6.0
<所要時間別>								
15分以内	5.1	11.3	18.4	23.0	21.5	14.5	3.9	2.3
30分以内	0.6	3.6	14.8	24.3	32.0	15.4	3.0	6.5
1時間以内	0.0	2.6	6.4	17.2	33.9	33.5	2.6	3.9
3時間以内	1.1	0.0	3.9	3.4	25.1	54.7	5.0	6.7
3時間超	0.0	0.9	0.0	0.9	2.6	62.3	16.9	16.5

注:もともと親しくつきあっている孫、およびその親との食事についての回答結果(以下同じ)

はじめに、子や孫(最も親しい孫やその親)との食事の頻度をみてみます(図表1)。

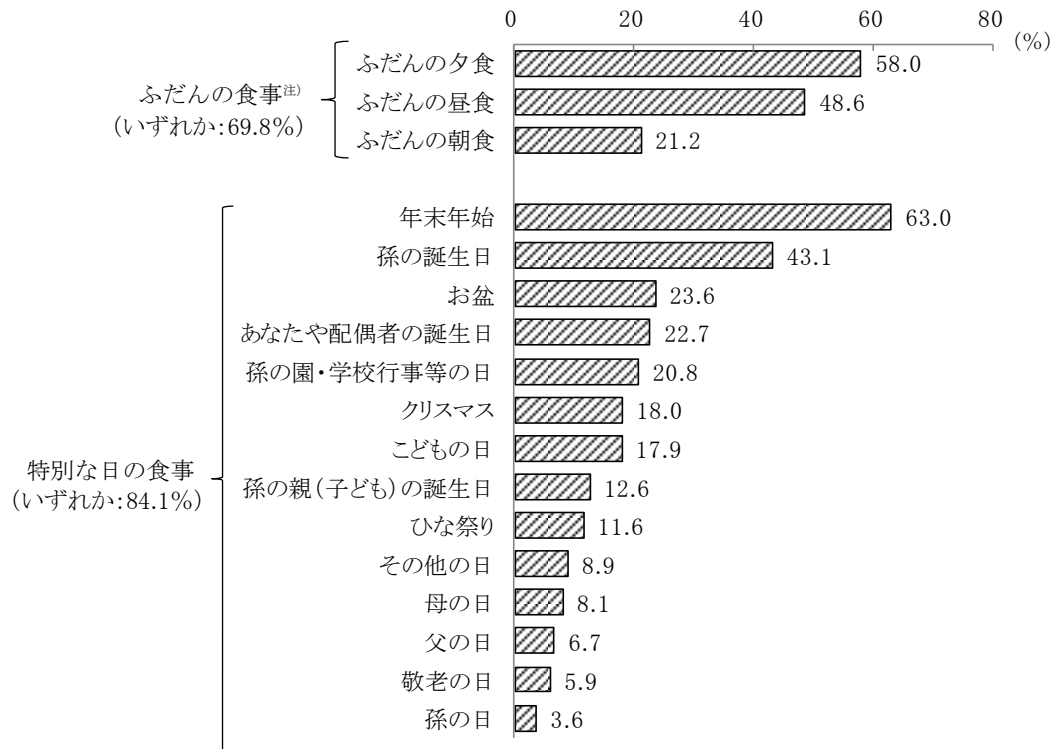
回答者の約半数は「月に1回」以上の頻度で子や孫と食事をしています。食事の頻度は、孫が就学前の人や、孫が娘の子の人、子や孫が近くに住む人でおおむね高い傾向にあります。例えば、1時間以内の範囲に、就学前の孫がいる娘が住む人では、3人に1人が「週に1回以上」という比較的高い頻度で子や孫と食事をともにしています(図表省略)。

一方、孫宅までの所要時間が1時間を超える「3時間以内」や「3時間超」の人では、食事の機会が「年に2～3回程度」以下の人がそれぞれ66.4%、95.7%を占めています。全般的な傾向として、物理的な距離は、食事を含めた対面的な交流の機会を少なくする要素の1つだと考えられます。

子や孫との食事の機会①

過去1年間に子や孫と食事をした人のうち、
「ふだんの食事」の経験率は 69.8%、「特別な日の食事」では 84.1%

図表2 過去1年間の食事の機会(全体)＜複数回答＞



注 :回答者は、図表1で「ほとんどない」と答えた人を除く 992 人。ここでの「ふだんの食事」とは、「特別な日の食事」以外の日常の食事を指す

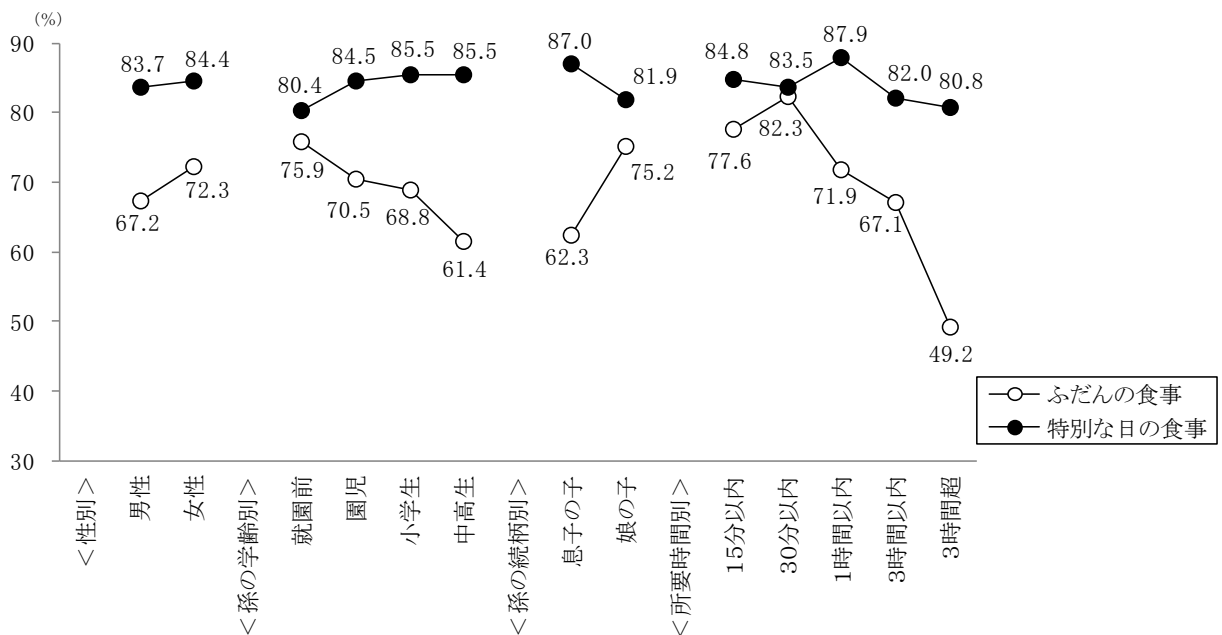
次に、図表1で子や孫と食事をする機会があると答えた人に対し、過去1年間のどのような機会に食事をしたのかを複数回答でたずねました。その結果、「ふだん（年末年始や各種の記念日などの特別な日以外）の食事」に関しては、「夕食」（58.0%）で半数を超え、「昼食」（48.6%）、「朝食」（21.2%）の順となっています（図表2）。また、過去1年間に、子や孫とこれらのいずれかをともにした人は 69.8% を占めました。

一方、子や孫と食事をする機会があると答えた人のうち、過去1年間に、年末年始や各種の記念日などの「特別な日の食事」のいずれかを子や孫とともにした人は 84.1% を占めました。もっとも経験者が多かったのは「年末年始」（63.0%）で、これに「孫の誕生日」（43.1%）、「お盆」（23.6%）、「あなたや配偶者の誕生日」（22.7%）、「孫の園・学校行事等の日」（20.8%）などが続いています。

子や孫との食事の機会②

「ふだんの食事」の経験率は、孫が就園前の人や孫が娘の子の人、
子や孫が 30 分以内の範囲に住む人で高い

図表3 子や孫との食事の機会(性別、孫の学齢別、孫の続柄別、所要時間別)



注：回答者は、図表2に同じ。数値は、過去1年間に図表2の「ふだんの食事」「特別な日の食事」の各項目のいずれかを経験した人の割合

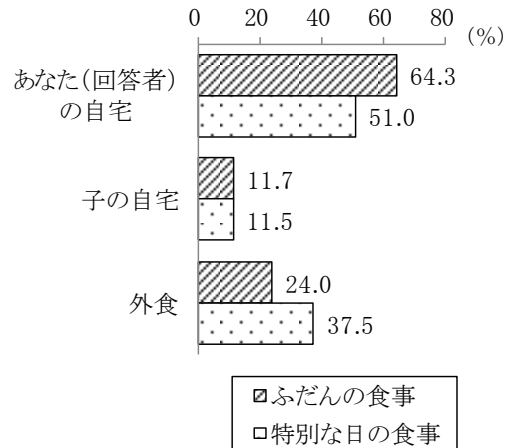
次に、過去1年間における「ふだんの食事」と「特別な日の食事」の経験率を主な属性別に比較しました（図表3）。

これをみると、「ふだんの食事」の割合は、孫が就園前の人や孫が娘の子の人、子や孫が30分以内の範囲に住む人で高くなっているのに対し、「特別な日の食事」はこれらの属性によらず高くなっています。「ふだんの食事」に比べて「特別な日の食事」は、物理的な距離の影響を超えて、家族が集まって食事をともにする機会だと考えられます。

子や孫との食事の主な場所

食事の主な場所は、「あなたの自宅」

図表4 子や孫との食事の主な場所(食事の機会別)



注:回答者は図表2に同じ。

続いて、子や孫との食事の際に利用する主な場所についてたずねた結果をみてみましょう(図表4)。

「あなたの自宅」「子の自宅」「外食」という3つの選択肢のうち、「ふだんの食事」「特別な日の食事」の双方でもっとも多くあげられたのは「あなたの自宅」であり、「ふだんの食事」では64.3%、「特別な日の食事」でも51.0%を占めています。

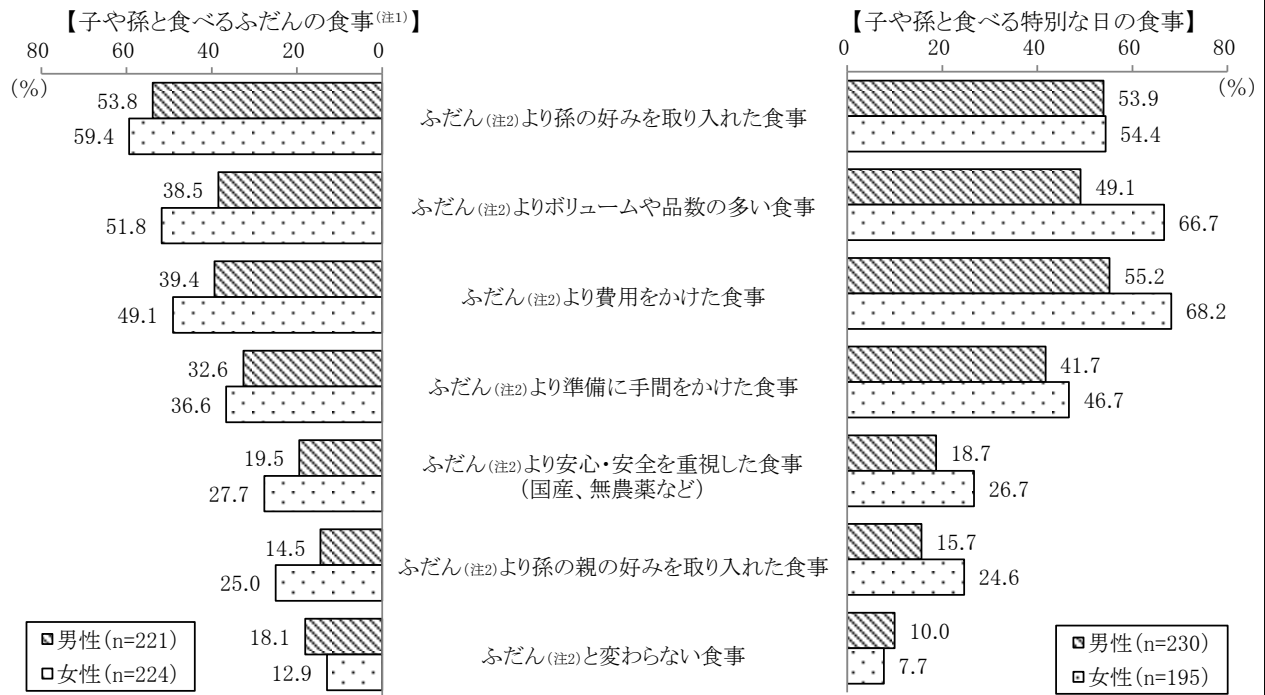
ただし、「特別な日の食事」では「外食」をあげた人が37.5%と、「ふだんの食事」(24.0%)に比べて10ポイント以上高くなっています。「特別な日の食事」についても、「あなたの自宅」がもっとも多くあげられていますが、「ふだんの食事」に比べると外食する人が多いと考えられます。なお、「子の自宅」をあげた人は、どちらの機会についても1割程度にとどまりました。

また、これらの回答で「あなたの自宅」と答えた人では、食事をつくる人について、親世帯の女性をあげた人が9割以上を占めていました(図表省略)。この結果からは、子や孫が自宅に来て食事をする機会は、夫婦2人暮らしの高齢女性にとって、子や孫のために料理をしたり、そのための準備や後片付けをする機会にもなっていることがうかがえます。

子や孫との食事の内容

自宅で「特別な日の食事」をともにした女性の 68.2%が「ふだんより費用をかける」

図表5 自宅で食べる場合の子や孫との食事の内容(食事の機会・性別)＜複数回答＞



注1:ここでの「ふだんの食事」とは、子や孫と食べる「特別な日の食事」以外の日常の食事を指す

注2:ここでの「ふだん」とは、子や孫との食事ではない日常の食事、すなわち夫婦だけや1人で食べる食事を指す

注3:回答者は図表4で「あなたの自宅」と答えた人。数値は「あてはまる」「ややあてはまる」の合計

続いて、子や孫との食事の主な場所について「あなたの自宅」と答えた人に注目し、食事の内容にどのような特徴があるのかをみてみましょう(図表5)。

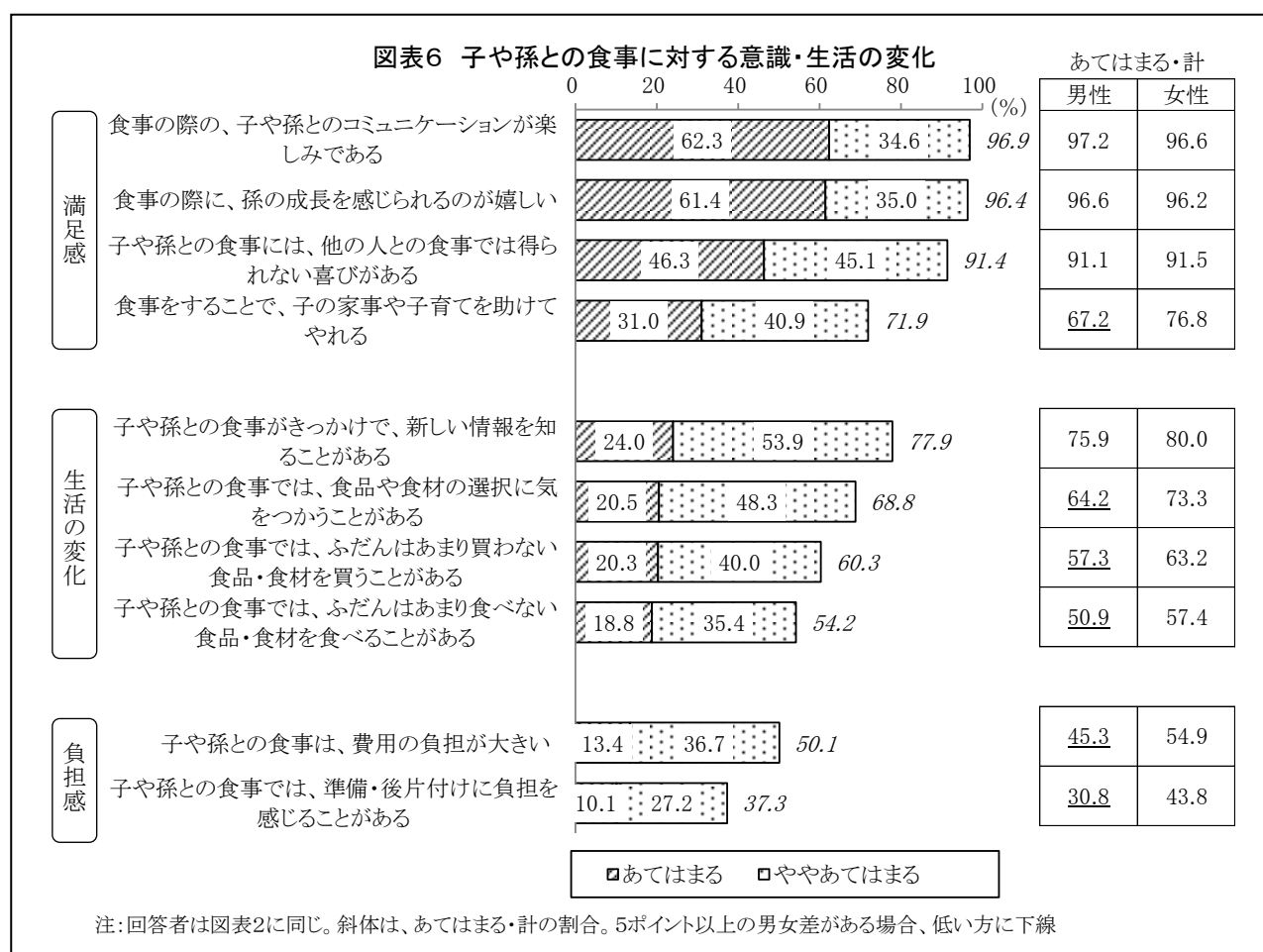
まず、「ふだんと変わらない食事」と答えた人の割合をみると、グラフ左側の「子や孫と食べるふだんの食事」及びグラフ右側の「子や孫と食べる特別な日の食事」の双方とも1～2割弱にとどまっています。回答者にとって子や孫との食事は、夫婦だけや1人で食べるふだんの食事とはさまざまな点で異なっていると考えられます。

具体的にみると、グラフ左側の「子や孫と食べるふだんの食事」でもっとも多かったのは、男女とも「ふだんより孫の好みを取り入れた食事」(男性53.8%、女性59.4%)であり、「ふだんよりボリュームや品数の多い食事」(同38.5%、51.8%)、「ふだんより費用をかけた食事」(同39.4%、49.1%)、「ふだんより準備に手間をかけた食事」(同32.6%、36.6%)などが比較的高い割合を占めました。

一方、グラフ右側の「子や孫と食べる特別な日の食事」では「ふだんより費用をかけた食事」(同55.2%、68.2%)が男女とももっとも多くあげられています。また、費用の面だけでなく、量や労力の面でも、「特別な日の食事(グラフ右側)」の方が「ふだんの食事(グラフ左側)」より奮発した対応がとられているようです。いずれの項目でも、女性が男性を上回っており、子や孫との食事に際してふだんとは異なる対応を行う傾向は、女性でより顕著といえます。

子や孫との食事に対する意識・生活の変化

97%が「食事の際のコミュニケーションが楽しみ」



次に、子や孫との食事に対する回答者の意識をみてみましょう（図表6）。まず、満足感に関する「子や孫とのコミュニケーションが楽しみである」「孫の成長を感じられるのが嬉しい」「他の人との食事では得られない喜びがある」の3項目では、あてはまると答えた人が9割を超えています。回答者にとって子や孫との食事は、単なる食事ではなく、家族とのコミュニケーションや孫の成長を感じられる楽しみがあり、その喜びには特別の価値があるようです。

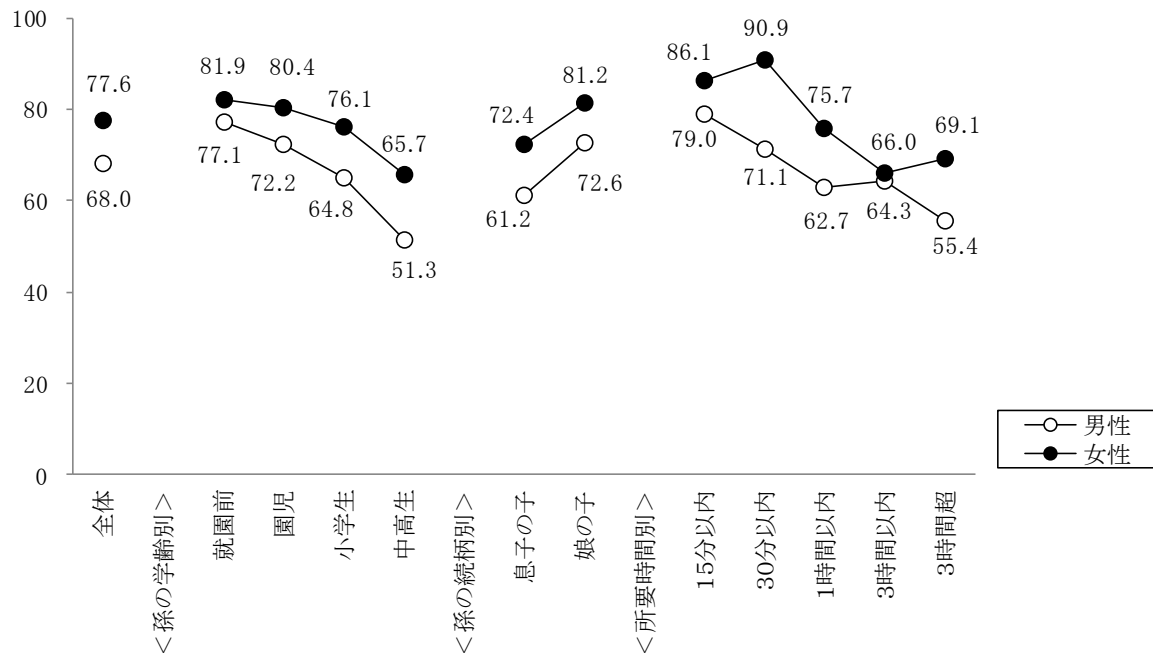
また、生活の変化に関しては「新しい情報を知ることがある」（77.9%）、「食品や食材の選択に気をつかうことがある」（68.8%）、「ふだんはあまり買わない食品・食材を買うことがある」（60.3%）、「ふだんはあまり食べない食品・食材を食べることがある」（54.2%）など、情報面のほか、食生活や食品・食材選択に関する影響をあげる人がいずれも半数を超えています。

最後に負担感に関しては、「費用の負担が大きい」が50.1%、「準備・後片付けに負担を感じる」が37.3%となりました。これらのうち、「準備・後片付けに負担を感じる」では、男女とも該当者の割合が最も低かった一方で、男女差がもっとも大きく、女性（43.8%）が男性（30.8%）を10ポイント以上も上回りました。

支援としての食事

孫が就学前の女性や孫が娘の子の女性、孫が自宅から30分以内に住む女性では、8割以上が「子の家事や子育てを助けてやれる」

図表7 「食事することで、子の家事や子育てを助けてやれる」と答えた人の割合
(性・孫の学齢別、性・孫の続柄別、性・所要時間別)



注: 回答者は図表4で子や孫とふだんの食事、または特別な日の食事を食べる主な場所について「あなたの自宅」と答えた624人。
数値は「あてはまる」「ややあてはまる」の合計

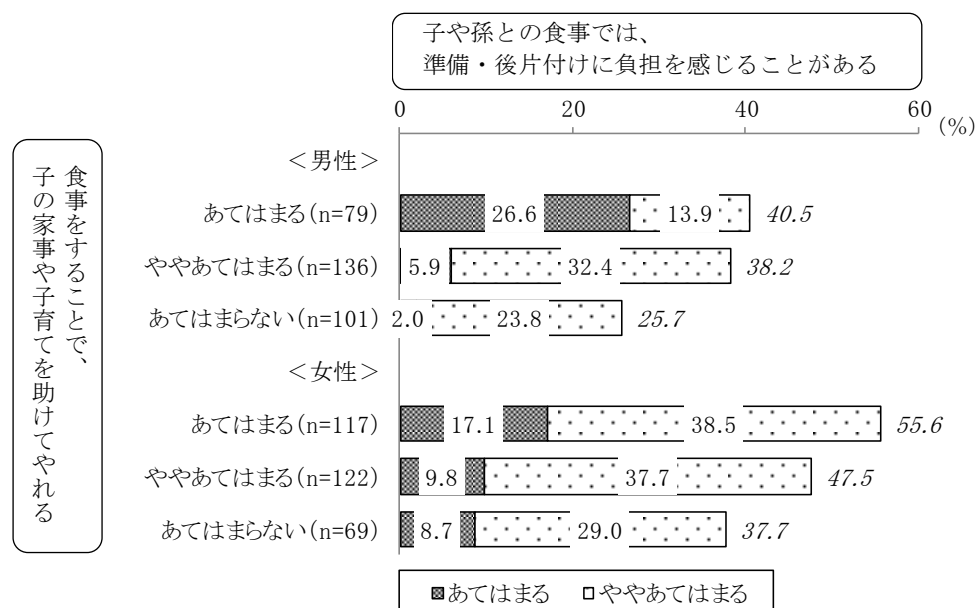
ここで、子や孫との食事の主な場所について「あなたの自宅」と答えた人に注目し、子や孫と「食事することで、子の家事や子育てを助けてやれる」という設問にあてはまると答えた人の割合を主な属性別に比較してみます（図表7）。

これをみると、男性より女性、なかでも孫が就学前の人や孫の続柄が娘の子の人、子や孫が自宅から30分以内の範囲に住む人で、あてはまると答えた人の割合が特に高くなっています。これらの人は、子や孫とふだんの食事をともにする関係（図表3）であり、頻度の面でも比較的高い頻度で食事をともにする人が多くなっていました（図表1）が、こうした交流の背景には、子世帯の助けになればという女性の親心があると考えられそうです。

準備・後片付けの負担

「子の家事や子育てを助けてやれる」という意識が強い女性では 「準備・後片付けの負担感」も大きい

図表8 「子や孫との食事では、準備・後片付けに負担を感じることもある」と答えた人の割合
(性・子世帯への支援意識別)



注: 回答者は図表7に同じ。斜体は「あてはまる」「ややあてはまる」の合計割合

また、「食事をすることで、子の家事や子育てを助けてやれる」とより強く感じている女性では、食事をめぐる準備や後片付けに対する負担感も大きい傾向にあるようです（図表8）。

図表のように、「食事をすることで、子の家事や子育てを助けてやれる」に「あてはまる」と答えた女性では55.6%、「ややあてはまる」と答えた女性では47.5%が「準備・後片付けに負担を感じる」と答えているのに対して、「あてはまらない」と答えた女性では37.7%にとどまっています。男性でも同様の傾向がみられるものの、女性ほど顕著ではありません。女性の場合、支援になればという思いが強い人ほど、結果としての負担感が強くなってしまいう面もあるのかもしれません。

《研究員のコメント》

(1) 母方近居家族にみる親密交流

今回の調査では、高齢夫婦世帯における別居家族との「食事」の実態に注目し、それらが高齢者の意識の面でどのような意味をもっているのかをたずねました。

その結果、過去1年間に子や孫と食事をしたことある人のうち、「ふだんの食事」をともにした人は69.8%、年末年始などの「特別な日の食事」では84.1%を占めました。また、食事の頻度や「ふだんの食事」の経験率は、孫が幼い人や、孫が娘の子の人、子や孫が近くに住む人で特に高く、親密な交流の実態がみられました。そして、このような食事の場として最も多くあげられたのは「あなた（回答者）の自宅」です。多くのケースにおいて、子が巣立った夫婦2人暮らしの親の家は、子の家族形成以降も、家族が集い、コミュニケーションを楽しむ場の中心であり続けているようです。

こうした食事では、孫の好みや量・品数が重視され、子や孫以外の人と食べたり、1人で食べるふだんの食事に比べて、より多くの費用や労力がかけられるようです。年齢や好みが異なる子や孫との食事の機会は、夫婦2人だけで暮らす高齢男女の生活にさまざまな影響をもたらすことがうかがえます。祖父母にすれば、ふだんは別々に暮らしているからこそ、ともに過ごす時間をできるだけ充実したものにしたいと願う気持ちが強く働くのかもしれません。

(2) 祖母の支援意識と負担感

実際、食事に対する意識をみると、回答者のほとんどが子や孫とのコミュニケーションを楽しみ、他の人との食事では得られない特別な喜びを感じていると答えています。また、食事の主な場所について「あなたの自宅」と答えた人のうち、食事をする中で「子の家事や子育てを助けてやる」と感じている人は、男性より女性、なかでも孫が就学前の人や孫が娘の子の人、子や孫が自宅から30分以内の範囲に住む人で、特に多くなっていました。就学前の孫がいる母方近居家族では親の自宅での食事という形で頻繁な交流の実態がありますが、これらの交流の背景には、自宅での食事が子世帯の支援になればという女性の親心があるようです。

ただし、このような意識が強い女性では、食事をめぐる準備や後片付けに対する負担感も大きい傾向がみられました。子や孫との食事の機会に自宅に子や孫を迎え入れ、その際の準備や後片付けを担うことの多い女性では、孫が喜ぶ食事の内容を考慮し、娘の助けになればとふだんより多くの労力をかけたり、かけようとして、負担感につながってしまう場合もあるのかもしれない。親元を巣立った子が別世帯を構えて家族を形成し、自身が年老いて以降も、女性にとって自身の家は、親の立場で子やその家族を迎え、いつまでも支援を提供する側でいようとする場所という面もあるのではないのでしょうか。

老後の子や孫との付き合い方をめぐる高齢者の価値観が「密着型」から「交流型」へと移行するなかで、近年、子育て期の男女からは、子育てに親の支援を得やすい「近居」が注目され、理想的だと支持されています。しかしながら、親世代の価値観の変化をふまえれば、子世帯が親を頼るケースも多い子育て期の近居では、祖母の親心を尊重しながらも、過度な負担にならない交流の形を、子夫婦など周囲の家族がうまく工夫することも必要になりそうです。

(研究開発室 上席主任研究員 北村 安樹子)